

IV-97

ロールプレイによる住環境整備に対する住民意向の集団力学分析

徳 島 県 正 員 ○笠井達雄
徳島大学工業短期大学部 正 員 山中英生

1. はじめに

我が国の都市に集積する密集市街地では、相隣環境や防災性の悪化を抱え、区画整理などの住環境整備が望まれているが、空間的制約の多さや住民の利害関係の複雑化のため、整備に対する合意形成に多大の困難が伴っているのが現状である。

本研究は、こうした市街地での住環境整備の方策を検討するため、合意形成の主体となる住民集団に着目し、集団特性と合意形成能力の関連を分析した。具体的には、実地域での意向調査から、様々な意向をもつ代表住民を想定して、住民集団を数種構成し、それぞれの集団の合意形成能力を、社会心理学における集団力学分野で用いられるロールプレイ実験によって評価することで、合意形成の鍵を分析した。

2. ロールプレイ実験の方法

ロールプレイ「役割演技」とは、一般に数名程度のプレイヤーが役と議題を与えられて議論を演じ、これを複数の観察者が観察することを指す。ロールプレイは、教育心理学では自己啓発的教育方法として用いられているほか、社会心理学では集団内の個人間の相互作用の分析や、それに伴うリーダーシップの現象の把握、さらには集団としての合意形成能力の分析に用いられている¹⁾。本研究では、主に後者の目的で用い、各メンバーに対する機能を設定し集団特性を操作することで、集団としての能力がどのように変化するかに着目した。

(1) 代表住民の抽出

ロールプレイ実験のロールとなる住民は実際の地区での実在住民をモデルとするため、大阪市福島区における密集市街地での住民意向調査(3168票)より、図1の手順で代表住民を抽出した。すなわち、まず様々な住環境整備の方向についての賛否反応をもとに、因子分析とクラスター分析によって、異なった意向パターンをもつ13グループを分類抽出した。次に、各グループの典型的な意向や属性に合致する人物を因子得点と属性値を用いて抽出し、さらにそれぞれのアンケート票をもとに、職業、資産状況、

居住年数、面整備に対する意向を検討し、意識とその理由が推測可能な住民13人を抽出した。

(2) ロールプレイの方法とメンバー機能の設定

ロールプレイは、具体的な地区での面的整備(単純な都市再開発型、および立体換地ビルを含む区画整理型)に対して、住民内部で代表者が話し合いを行うという設定にした。ただしプレイの時間的な制約から、代表住民は整備に対する賛成派・中間派・反対派を考慮した6~7名とし、うち1名は町会長として整備内容を説明する役割も兼ねることとした。プレイヤーは、区画整理事業企画担当者、大学研究者で、観察者はそれに大学生も加わる。プレイヤーには代表すべきグループの意向、関心事、属性といった住民像を予め与えて議論を行なわせた。

さらに、集団特性を操作するために、ベネ²⁾³⁾による課題達成機能(T)、集団維持機能(M)、個人主義的機能(I)のカテゴリー(表1)を用いて、各人に集団におけるコミュニケーションの機能の指針を設定した。ただし、実際の機能は各人の発言によって判定した。具体的には、数名の観察者が観察し、各発言の機能および役としての機能を判定し、プレイ後にプレイヤーを交えて議論した。結局、表2に示すように、議題となる整備方策、住民の整備賛成・反対意向、さらにメンバー機能の構成を変化させた表2の6パターンについてプレイが実施できた。

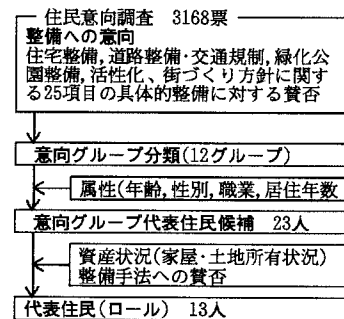


図1 代表住民の抽出方法

表1 ベネによる集団過程におけるメンバー機能

課題達成機能 T task function	与えられた課題達成のために、課題の選択や決定をし、それを完成させようとする機能的な行動をとる。口火をきける、情報を求める、情報を与える、意見を求める、意見を述べる、吟味する、関連づける、方向づける、評価する、促進する、要約する、記録する、などの発言・行為
集団維持機能 M Maintenance function	集団組織や規程を維持し、集団の崩壊を防ぐ役割、集団の性格や体質をつくりそれを保守しようとする。メンバーの集団性格に反する行為を批判する、周辺に留まる人を中にいれる、メンバー相互の調和を図る、励ます、調和を図る、門番役をする、規程設定をする、支援する、譲歩する、観察するなどの発言・行為
個人的機能 I Individual function	個人の欲求・動機を中心に行動する、集団より個人の欲求充足に役立つ機能。じゃまをする、攻撃する、人の注意をひく、持論を固執する、自分のからにたてこもる、人を見下したり支配する、なまける、他人によりかかるなどの発言・行為

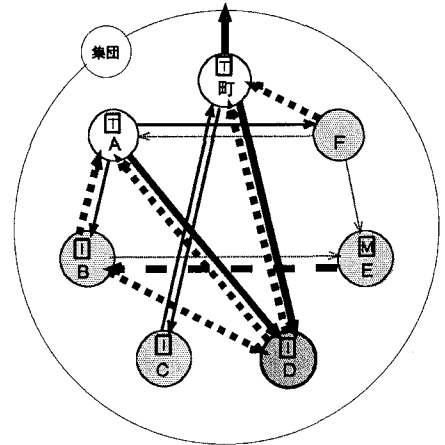


表2 ロールプレイの集団構成と議題

議題	議題No.	1	2	3	4	5	6
		A	B	A	B	A	B
住民意向 メンバー機能	賛成派 T	2	2	2	3	2	1
	賛成派 M		1	2		1	2
	賛成派 I						
	中間派 T						
	中間派 M	1			1	1	1
	中間派 I	2			1		
反対派	無	1	2				
	反対派 T					1	1
	反対派 M						
	反対派 I	1	2	3	2	1	2
グループ数計		7	7	7	7	6	7

議題A:市街地再開発事業

議題B:立体換地方式土地区画整理事業

3. ロールプレイ実験の分析結果

各プレイでの個々の発言を上記のメンバー機能に照らして判断し、これから時間経過に応じてメンバーの相互作用がどのように変化したかを分析した。さらに、その結果から、各人が他のメンバーに対して卓越して働きかけた機能を判断し、メンバー間の相互作用の図を作成し、集団としてのまとまりやリーダーシップの可能性を検討した。

例えば、図2は例として第1回プレイについての相互作用の図を示している。このプレイでは、Aが賛成派として課題達成機能の発言を繰り返し、Dが反対派（I）として発言するという形で進化した。リーダーシップの面では、Aが賛成派の町会長と連携したが、Dの個人主義的意見も消極的の中間派のB、Fの共感を得る形になり、この2集団以外のC、Eの言動が効果を持たなかった。そして、これらの集団の分化を防ぐようなM機能は極めて少なく、効果がなかったことが特徴で、心理的な集団の分裂が生じたことがプレイ後の話し合いでも確認されている。

第3回と第6回は、M機能を設定された2人の人

物が、反対派（I、T）、賛成派（T）に働きかけた結果、上記のような心理的分裂感を救うことに成功し、話し合いを継続するという結論に至る話し合いとなった。また、第4回については、T型の賛成派の意見が強行で、1名の反対派が心理的孤立状態に陥るという結果になった。その他のプレイについては集団の分裂や凝集感は少なく中間的な結果となった。この結果をみるかぎりでは、合意形成の鍵は2人の賛成的M機能の存在と彼らの集団への働きかけであるといえる。

4. おわりに

議題の内容の影響や、個人のパーソナリティの影響、プレイヤーの上下関係など影響を考えなければならない要因は極めて多く、一般的結論が得ることは難しい。ただし、合意形成への事前検討をする手段として、あるいはそれを通じて計画者や行政担当者の教育的な手段としてロールプレイは十分有効と考えられることが、今回の実験における意見交換からも確認されており、今後、こうした面の検討も進めて行きたい。

- 参考文献 1)心理学実験指導研究会:実験とテスト＝心理学の基礎、培風館
2)中村陽吉:心理学的社会心理学、光生館、1972
3)Benne, K.D.:Functional roles of group members, journal of social issues. 1948